

名画の魂 一番鶏

馬佐良

絵：野口宣友



「しまったー！見るんじやなかった」旅の商人は、御内谷の山道でブルブルと震えました。夕暮れで辺りが暗くなつた頃、商人が御内谷の山道に入つていくと、一匹の狼をへるりと沢山の狼が取り囲んでいるのを見つけてしまったのです。しかし、狼たちは円になつたまま、商人に気付く様子もありません。「よしー！この間に通り抜けてしまおう」と商人は足音を忍ばせて道を通ることにしました。すると突然、犬の子が鳴くような声が聞こえてきました。「ごじゃあ、狼のお産だ。この間に急いで逃げよう！」と山道を走り抜けました。

商人は馬佐良の宿にころげるように走り入りました。宿の家族は「あら、どげしなつた」と商人の尋常でない様子に驚いて尋ねました。「なんと、狼に出会つて、お産の最中で助かっただ。」と商人は青い顔で事情を話します。すると、宿の亭主が「何！狼のお産を見た！」と言って、手から茶碗を落として立ち上がりました。「えらいこつちや！狼はお産を見られたら、見た人間を食い殺さねばすまさないということですよ」亭主は血相を変えて家族を集めると、全員に下の屋敷に避難するよ

うに言いつけました。そして「あんたは仕方がねえから、この家の天井に上がつて隠れてごしなさい」と商人を天井裏に案内しました。

商人は、くもの巣だらけの狭い天井に必死に登り、じつと息をひそめて隠れていました。夜もふけた丑三つ時、谷に「ウーツオーツ」と恐ろしい声で狼の遠吠えが聞こえたと思うと、馬佐良の宿に狼の大群が押し寄せてきました。商人は天井の柱にしがみついて、懸命に息を殺しました。狼たちは宿の戸を押し破ると、あちこちを嗅ぎまわつて、商人を探します。

とうとう、天井に商人が隠れていることに気付いた狼達は、宿中を歩き回つて、天井を見上げては唸り声を上げます。とても生きた心地がしない商人は「天照皇天神様、正八幡宮様、観世音南無釈迦無二佛、法華経勧請、一切の神様、仏様、どうか危難を救わせたまえ」と、一心不乱に祈り続けました。

狼達は一匹一匹重なつて、一段一段と高くなり、あと一歩で天井にいる商人に届くという時、突然、

「クケッコ、クケッコ」と鶏がふた声鳴き声を上げました。す

ると積み重なつた狼達がガタガタと崩れ落ち、さつきまでの勢いが嘘のようになつた外へと去つていきました。

日が昇ると、宿の家族や村人達が心配してやつて来ました。商人は天井から降りて、鶏の鳴き声に助けられたことを話すと「そいつはおかしいなあ、この家には鶏は一羽もあらん」と亭主は腕組みをして考えました。「もしや、この掛け軸か」と座敷の床の間に架けてある掛け軸を指差しました。掛け軸には見事な筆運びで雌雄の鶏が描かれており、雄鶏が頭を上げて鳴いていました。これは「旅の画聖」と言われた狩野法眼が山道で狼に襲われた時、亭主の協力で一命を永らえたお札にと書き上げたものでした。

「この掛け軸をかけてから、不思議と家に災難が起こりません。朝夕に拝んでおります」と亭主は話しました。馬佐良の古老は掛け軸を見て「狼に悩まされた絵師の念が、この絵にこもつてあなたの危機を救つたのでしよう。魂の入つた絵はまことに生きていますものですよなあ」と言いました。

一番鶏に助けられた商人は、掛け軸に二礼し、拍手を打つてお礼をしました。おしまい